

# 語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (56)

## (A Basic Way of Reading Trump-Language)

後藤 寛

大地震(big earthquake / [In Basic] great earthshock)など災害・天災(disaster / calamity / [In Basic] destruction by natural forces)が起これば神の業(act of *God*)という見方とともに、衣食住を基本とするこの世の人間の社会生活上での思想体系 structuralism (構造主義)の一端を垣間見るが、本連載稿では国を治める政治(米国政治)を題材にこの思想体系との関わりを意識下においている。今回は(1)と(3)を試問の形で扱う。英語とスペイン語の国アメリカであるが、英・西対照は今回は省略する。

pattern recognition (パターン認知)と音感の伴う reading での理解法であるが、今日 cognitive linguistics (認知言語学)の専門研究もかなり進展している。この分野は本連載でたびたび触れてきた米国の G. Lakoff 氏の研究に端を発する。氏は目下も追究中である。ここでは Ogden-Richards の Basic 言語学(orthology)との接点も求めたい。

(1) [ a, am, at, I, in, Japan, the ] G-20, representing our Country well, but I heard it was not a good day for Sleepy Joe or Crazy Bernie. One is exhausted, the other is nuts — so what's the big deal? (June 28, 2019)

**試問** 1) [ ] 内を語整序で意味の通るようにするとどうなるか (1語不要)。

2) 文中の太線語 representing と同系でない1語は次のうちどれか。

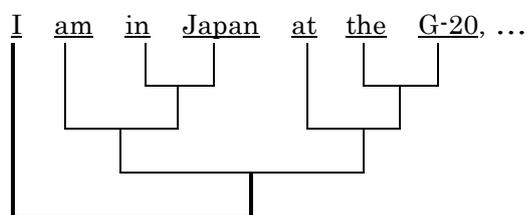
essence, exhaust, interest, yes

▲2019年の6月末、20カ国・地域首脳会議(G-20大阪サミット)が開催され、米国からは Trump 大統領が出席したが、日本にいても一方で米国内の大統領選に向け立候補している民主党議員が気にはなっていたようである。寝ぼけた Joe (ジョー) や狂った Bernie (バーニー) には良くない日のようだ、Joe はやつれ、Bernie はばか者(nuts)だ、いったいどうなっているのだ? と Trump 氏が Twitter 上でつぶやいている。

1) は基本的なものである。自分自身の位置づけ < I AM HERE.> を基文と考えればその派生文となるが、この場合 G-20 が後置されていて語整序は自動的に決まる。

2) の representing はもちろん Basic 語 **representative** (代表者) と同系であるが、語中の語根部 -es- の音声から「存在すること、そうあること」の原義を直感したい。

.....  
[正解] 1) は I am in Japan at the となる。1語 'a' は不要。この場合の空間語の配列順序は in が先、at が後ろ。語整序では英語の総合的知識が働き有効。語整序も structural linguistics の実践となる。1)での語結合を本連載(12)などで扱ったやはり structural linguistics での Immediate Constituent Analysis (直接構成素分析: IC 分析) 風の下に示しておく。2) は exhaust が非同系語 (essence, interest, yes は同系)。なお、un-Basic 語 yet も同系 [拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(36)参照]。



IC 分析は「近いものは近づけよ」という考え方となる。本連載(49)の(1)などで言ったが、文を頭からではなく逆さ読み(reverse reading)により語結合を実感していく逆さ反復訓練(reverse repetition practice)を積むとよい。この場合であれば I am ...ではなく、G-20 → the G-20 → at the G-20 → Japan at the G-20 → in Japan at the G-20 → am in Japan at the G-20 → I am in Japan at the G-20.と末尾から追うのである。語と語の慣用的な co-occurrence (共起関係) を含め文全体の流れが実感できる。

(2) After some very important meetings, including my meeting with President Xi of China, I will be leaving Japan for South Korea (with President Moon). While there, if Chairman Kim of North Korea sees this, I would meet him at the Border / DMZ just to shake his hand and say Hello (!) (June 29, 2019)

▲これは上の(1)のあと、G-20 大阪サミット閉幕日〔6月29日(日本時間)]に Twitter 上に書き込まれ、即座に世界中を驚嘆させることとなったものである。

「大阪での中国の習金平国家主席との会談をはじめいくつかの重要な会合のあと、私は日本を去り韓国へ向かう(韓国の文在寅大統領と共に行く)、そこに滞在中にもし北朝鮮の金正恩党委員長がこの tweet を閲覧するなら南北軍事境界線(38度線)非武装地帯(DMZ: Demilitarized Zone)で会ってもよい、手を握り挨拶するだけでもよい!」という内容である。Trump 氏はメディア会見で会うのは2分間でもよいとも言っていた。

結果的にこの tweet を書いた翌日の30日に、挨拶だけではなく Trump 大統領は DMZ の北朝鮮側に越境し、板門店で金委員長と50分ほどの事実上3回目の電撃米朝首脳会談〔2019年6月30日(現地時間)]となった。これは画期的な出来事で大ニュースとなった。具体的な会談内容は明らかにされなかったが、ともかく現職の米国大統領が北朝鮮の非武装地帯の北朝鮮側に足を踏み入れたことは歴史の1頁をつくった。

太線語 including は Basic 語 **cloth** と同系で「包むこと」が原義である。close, closet, conclude, clause (節)なども同系語〔同上拙著、第二部、例(82)参照〕。

太線語 leaving の leave (去る)の本来的な原義は「あとに残すこと」である。この場合は「日本をあとに残し、韓国へ向かう」わけである。印欧祖語 PIE の etymon (音素形)が/LEIP/(LIV)で Basic 語 **living** と同系である。プラスα Basic 語 **life** はもちろん同系であるが、「命」とは「残すもの、残っているもの」ということになる。un-Basic 語 delay (遅れる)、relay (リレー)なども同系〔同上拙著、第二部、例(104)参照〕。

文中下線部 will be, sees, would meet の3つの動詞の叙法(mode)にも注目しておいてよい。最後の would meet 「会ってもよい」は実現の不確かさを暗示する subjunctive (叙想法)である。世界中の多くの人を読んだであろう tweet である。

また、下線部 shake his hand は shake hands with him とは若干ニュアンスは違う。

(3) Leaving South Korea after a wonderful meeting with Chairman Kim Jong Un. Stood on the soil of North Korea, an important statement for all, and a great honor! (June 30, 2019)

**試問** この tweet 文中の語 wonderful, soil, honor のうち Basic 全体系からみて、その範疇以外の語は?

▲G-20 大阪サミットのあと韓国を訪れ北朝鮮にも立ち寄った Trump 氏が「金委員長との素晴らしい会談のあと韓国を去る、北朝鮮の地に立ったが誰にとっても重要な声明となり大変光栄に思う」と言っている。文から意気揚々(elated)の音の響きも感じられる。

(試問ヒント): 2語は Basic の範疇内(within the framework of Basic)の語。

日常的に Basic 語・プラスα Basic 語・un-Basic 語を意識的に心の中で綿密に区分け

しておく癖をつけるのである。Basic の深奥に入るにはまずは本体の 850 語が心の中で溢れ出る状態になる必要がある。そうならない限りは Basic のすご味は所詮、実感できないはず。さらにプラス  $\alpha$  語への注目により手早く Basic 全体系の把握へとなる。

〔正解〕 *soil* と *honor* はプラス  $\alpha$  Basic 語。wonderful は Basic の範疇外(outside the framework of Basic)の語である。なお、wonderful の名詞形 *wonder* は韻文用語(verse word)としてのプラス  $\alpha$  Basic 語である〔プラス  $\alpha$  語なしには全 910 頁の旧・新約 Basic 聖書 BBE: *The Bible in Basic English* はただの 1 頁たりとも成立せず、読めない理屈となる旨は折に触れ言ってきたが、BBE で用いられるプラス  $\alpha$  語 (韻文用語 100 語、聖書用語 50 語) には味のあるものばかりが選定された。前回の試問で扱った *fate, vision* なども BBE で頻出する韻文用語である〕。

.....  
ところで、元来 C. K. Ogden が 1929 年 1 月の時点で提示した Basic 850 語は今日のものとはかなり違う。Basic の発見に至る過程などは今日 *Psyche* 全 18 巻(1920-1952)に残っているが、彼はそのうちの Vol. 9, No. 3 (Jan. 1929) で BASIC ENGLISH ではなく **PANOPTIC ENGLISH** と命名し 850 語の語表を提示した。これが「旧語表」である〔詳細は拙稿(2007)、「BASIC ENGLISH のレキシコン：旧語表から新語表へ」研究紀要(No.15)、日本ベーシック・イングリッシュ学会〔名称は当時〕参照〕。

Ogden はこの PANOPTIC ENGLISH にやはり動詞 V はないとし次の文を付加した。

You will be able to make use of all these words rightly after one week with the help of the special gramophone records which are kept by “The International Orthophonic Archives”. How is it possible to have a complete language with no “verbs”? The “PANOPTICON” gives the answer. [注、gramophone は旧語表では 850 語中の 1 語]。

正確には Ogden は 1925 年～1932 年の 7 年間に渡り語表を練り、最終的に BASIC ENGLISH として今日の語表としたことが Richards, I. A. and Gibson, C. (1974) *Techniques in Language Control* で次のように Basic 文で書かれている [p. 31 参照]。

Ogden and his able helpers went on for seven years (1925-32) testing out the powers of English words in comparison with one another. The outcome was Basic. (p. 31)

すなわち、Ogden は 1925 年から 4 年後となる 1929 年から 1932 年の 3 年間ほどの間にこの旧語表 850 語中の語のうち約 120 語を差し替え、それを新語表とし最終的に BASIC ENGLISH と命名した〔具体的にどういう語の差し替えでどういう語としたかなど旧語表と新語表の「対比研究」も大いに意義がある、詳細は拙稿(同上)参照〕。

語に関しては新語表のものが断然よいと考えるが、名称そのものは *The Meaning of Meaning* (1923)での言語心理学的論考の趣旨からしてもむしろ元の **PANOPTIC ENGLISH** のほうがよい(?) かもしれない。何かと思うところがいろいろあつてのことであるが、この当初の名称のほうが今日的には新奇性があり注目もされるか?

なお、**British, American, Scientific, International, Commercial** のもじり語(acrostic)の BASIC を、**Business, Administration, Science, Instruction, Communication** とする案を上記 Richards, I. A. and Gibson, C. (*ibid*) が示唆もしている [p. 27 参照]。

今日の「新語表」には ‘Examples of Word Order’ とし次の 2 文例が新たに付け加えられもし、さらに 7 つの規則(rules)が共にやはり Basic 文で付けられた。2 文例は語表によっては異なるものもあるが、ここでは次のものを①、②とし示しておく。

- ① The cameraman who made an attempt to take a moving picture of the society women before they got their hats off did not get off the ship till he was questioned by the police. [注、文末語 *police* は新語表では国際語彙(international word)の 1 語とされたプラス  $\alpha$  語であるが、旧語表では本来の 850 語中の 1 語とされていた]。
- ② We will give simple rules to you now.

ここでの①、②の Basic 文例を decoding 化（復号化）し、その key sentence pattern を仮現運動(apparent movement)的な MSOE /émsou/（Basic 別名：ASMO /æsmou/、ASSR /æsa/) スクリーン上に映し出してみる [cf. HTML 言語(HyperText Markup Language)]。

- Matrix Screen of Output English : MSOE
- Automatic Sorting Machine for Output English : ASMOE
- Automatic Statement Structure Reader : ASSR

STATEMENT					
		THEME : NP	RHEME : VP		
STR	C/C	N <sub>1</sub>	COP / V	N <sub>2</sub> / N <sub>3</sub> / A	ADV
1	φ	The cameraman	φ	φ	φ
2	who	φ	made	an attempt	φ
3	to	φ	take	a moving picture of the society women	φ
4	before	they	got	their hats off /	φ
5	φ	φ	did not get off	the ship	φ
6	till	he	was questioned	φ	by the police. //
1	φ	We	will give	simple rules /	to you now. //

(備考) 単一斜線 ( / ) はそれぞれ文の意味的 2 分割線。

pattern は現実には目には見えない不可視の抽象的存在で recognition (認知) するもの。sentence は形態素 {sent (= sense) + ence (= act)} に分割されるが、sentence の意味的分割線をここでは一種の sensory mirror (知覚鏡) を用い 投射 (projection) して見ている (see している) わけで、pattern を実際に目で見た (look した) 人はいないのである。N. Chomsky 風には deep structure (深層構造) での 隠れた秩序 である。なお、sensory verb (知覚動詞) see の概念は Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* の解釈上で重要となる。

科学では数学でもある structuralism (構造主義) は地質学との関わりにも注目するが、目に見える地層 (strata : STR) ・質・色彩などから奥に隠れ見えない pattern を問題とする。言語 pattern も一抽象概念 (concept) で system (体系) ・order (秩序) ・harmony (調和) であり、その認知で語が次々と喚起 (One word calls for another.) され連続的に文を再生していく心的状態がパターン認知ということになる。外国語 としてのいわゆる pattern practice では意識的反复再生で文の 慣用的 pattern を発見・認知していくわけである。

1970 年代初頭に D. Perlmutter と P. Postal が Relational Grammar (関係文法) を提唱し一時注目された。これによれば上の最後の例での pattern で give simple rules to you (N<sub>2</sub>-ADV) と give you simple rules (N<sub>2</sub>・N<sub>3</sub>) の 2 項配列の違いなどを深く知ることとなる。

なお、上の①、②の Basic 文で英音に特徴的な iambic rhythm (弱強リズム) も感じ取られよう。リズムの谷間 となる部分の英音に耳を開いていく必要がある。文中での前方の語の末尾音と後続の語の初頭音の連続性の問題であるが、これは基本的に i) liaison (連続)、ii) elision (脱落)、iii) assimilation (同化) の 3 種への注目ということになる。